

人とのつながりは、 自分の心しだい

下田教会 高川長久さん

高川長久さんは静岡県南伊豆町子浦で父の代から漁業を営んでいたが、近年続いた不漁により約700万円の借金を抱え、出漁できない状況に陥る。義兄に相談することを強く勧められたが、「自尊心が高く、頭を下げるなどもってのほか」と意にそわないとだれかれ構わず八つ当たりするような性質で、義兄とも半年近く絶縁状態。しかし、床に頭をつけて燃料費の支援を乞うと、義兄は快く援助を約束してくれた。謙虚な心になれば相手の理解を得られることを知る。操業を再開したものの燃料費の高騰で負債はかさんだ。結局、父や一緒に漁に出ていた弟に頭を下げて廃業。船を売却して借金の返済に充てた。高川さんは、これまでたくさんの人の我慢に支えられてきた人生だったと振り返る。そして、謙虚に頭が下げられる…こんなに楽な生き方はない! そう気づけたのは借金のおかげと受けとめている。



満足できる幸せ

法華経の「見宝塔品」に、法華経の教えを学び、実践する人は、ほんとうの意味で精進する人であって、「是れを戒を持ち 頭陀を行ずる者と名く」とあります。「煩惱を振り落とし、払い除く」のが「頭陀」の意味で、一日一食を守るとか、ボロ布で作った衣を着るなど、そのための精進が「頭陀行」です。

現代の私たちには、実践するのが難しいように思えますが、頭陀行をごく簡単に「少欲知足」と説明する文献もありますから、欲を少なくして足ることを知る生き方、与えられたものをできる限り素直に受け容れて、感謝のうちに暮らすことは、私たちが日ごろから心がける姿勢と重なるものです。

しかし、そのように理解していても、ものごとを感謝で受けとれないときがあります。そうしたときには、合掌・礼拝などの「形」から入ることも大切ですが、たとえば、食事の際に「いただきます」といつて合掌するのは、その習慣によつて、食事が摂れることや食材の命、さらには生きていることへの感謝の心が育つともいえるのですから。

生きていくなかで、授かったすべてに合掌する——そこに感謝と喜びがあり、ほんとうの満足と幸せがあるのです。

立正佼成会